

---

# 困った時の神頼み!!

平井純譚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

困った時の神頼み！！

### 【Nコード】

N0850T

### 【作者名】

平井純諷

### 【あらすじ】

科学の発展ですっかり廃れてしまった山海神社を舞台に繰り広げられるちよつと不思議な神様ファンタジー。

元気いっぱい常になポジティブな双子の姉「雨螺」と知識オタクで冷静沈着な妹「鎌螺」、そして信仰心が薄れて弱体化した土地神「夢寐」。この御三方が貧乏に負けずに日々戦い続ける。

正体不明の探偵「アイスバーン」の暗躍に世界が傾き始める。

## はじまり（前書き）

編集し直しました。

ちょっぴり不思議なお話でございます。

## はじまり

睡眠：多忙な現代人にとっては最も安息の時間である。

眠いから授業中に惰眠を貪っているのも身体に必要な存在であるから教師達も注意するのを躊躇うのも致し方ないのであろう。

しかし、何故生き物全般に睡眠という機能が備わっているのかは専門家の中でも意見が分かれており明確な答えが導けていないのが現状だ。

質の良い睡眠は集中力が倍増し好奇心が旺盛になるがあまり好ましくない睡眠を数日続けてしまえば様々な悪影響が出るのも周知の事実である。

ここまで我々の健康の要としている睡眠の正体とは何なのであるのか……

歴史上の知識人達は、睡眠という事柄においては顕著な程に重点を置いていた。

よく難関大学を狙う受験生が寝る数分前に英単語や数学の公式を覚えるために見ていると言ったことがあった。

知識重視社会や人間らしい人間になるためにも睡眠と人間は、切っても切れない関係があることがわかる。

さてここからこの物語の主題だ……

もしである……もしもその答えを一つだけ定義することを了承して頂けるのなら設けておきたいと思う。

それには「神」というなんとも面妖な言葉で表現されてしまい知識人に多大な混乱を招いてしまつかもしれないが目を瞑って欲しい。

ここでの定義とは……

神は現世における様々な心配事の償いとして、我々に希望と睡眠を与えた。

つまり睡眠を神の御業として定義した後に話を進めていきたいと思っております。

何気なく漫然と日常生活を営んでいる方々に普段とは違った別の切り口で世界が見渡せる事を願ってここに伝承を記す。

旅伝道師 ヤトノ

「夢寐神伝聞録 第二章」より引用。

\*\*\*\*\*

神社の境内の中で小さな女の子が地面に絵を描きながら元気な声で歌っていた。

地面に描かれているのは本人が好んで観ている児童アニメのようであるが、まだ絵を描くという作業に慣れていないらしく目玉が変に誇張されて目玉オヤジにしか見えない程だった。

時刻は夕暮れに成り始めた所で夕陽のオレンジ色が一直線に障害物を避けて通り過ぎていく。

すると一人のクルツとした猫毛をした女性が神社の石段を登ってきた。

格好は、本当に近所まで買い物に行くかのように白いエプロン姿で草履を履いていた。

女性は、中々の運動量となる石段を登り終わった後に呼吸を整えてから。

「はあ…はあ…もう、こんな所にいたのね！いつも言ってるでしょ！五時の合図が鳴る前に家に帰る事って…」

女性の言っている五時の合図とは、毎日午後五時になると学生の交通事故を防ぐ為の注意喚起として町内に流れる音楽のことであった。

曲は「夕焼けこやけ」。

「あつ！おかーさん！」

小さい女の子が嬉しそうに笑顔を女性に向けてトテトテと走り寄って女性の足元に抱きついた。

「もう、心配したんだからね！！こんな事、二度としちゃダメよ！」

「ごめんなさい……」

母親の注意に少しだけバツが悪そうに顔を下に向ける女の子。でも両手は、しっかりと母親のエプロンを握りしめる。

全く…といった感じで女の子の頭をグリグリと撫で回すと娘は、にぱっと顔を上げて甘える。

女性は娘が見つかった事に安堵したらしく、今いる場所の見渡した。

「ここは…随分懐かしいわね！あたしも子供の時によく遊びに来たわ！…」

悠久の時の流れをまるで塞き止めているかのように神社の社が鎮座しているのに感動する。

（そういえば…久しぶりに来たわ…ちょっとお参りしていこうかしら…）

普段から小銭を入れたがま口財布を持ち歩いていることを思い出した女性は、ジーンズのポケットからスツと取り出した。

ちよっとした支出に対応出来るように携帯している財布なので一円～百円までの硬貨が無造作に散らばっている。

「それじゃ！遅くまで見守ってくれた神様にお礼をしないとね！！」

「かみさまあゝ？」

女の子は、首を傾げて普段の生活では聞き慣れない言葉をおうむ返しのように聞き返した。

「そう！！この夜刀ノ町の平和を守って下さる偉い神様よ！」

「ふゝん！」

あまりピンと来てない顔だが「とにかく凄い！！」ことが伝わったのか眼をキラキラと輝かせて見上げる。

古ぼけた神社の本殿である社の前に移動し、財布から十円玉を取り出して娘にしゃがんで手渡した。

まだ小さな小さな手の平であるが宝物のように両手に掴んで眺める。

「じゃあ！頑張って目の前にある箱の中に入れてみようか！」

「うん！！」

お参りに来た時に賽銭を入れる箱というのは、盗難防止がよく分らないが柵的な物に阻まれている為、大人でも偶に外してしまいうくらい難易度が高い。

ましてや賽銭箱の前にある柵と同等の身長である女の子には、一発で入れるのは難しいというより不可能に近いことだった。

なんせ目標地点である賽銭入口が見えない（全体も）為、ほぼ勘で入れるしかない。

「よし！！えい！！」

小さく振りかぶって十円玉を賽銭箱目がけて入れようとするが……やはり、予想した通りにカップパー色の硬貨は、賽銭箱から検討外れの場所に落ちてしまった。

「あらら！！やっぱり難しいわよね……そんなに落ち込まなくて良いわよ！わざとじゃないから神様も許してくれるわよ」

外したことを気にしながら母親の顔を心配そうに向ける娘。

まあ、神主が入れ損じた賽銭を拾ってくれる情景が容易に想像できたので上記の表情を浮かべる娘に笑みを返す。

しかし、子供の好奇心はちよくちよく変化するモノで母親が笑顔を返す時には、上にぶら下がっている鈴に興味が注がれていた。

おそらく母親の顔を見る時に視界に入ったのであろう。

何もかもが新鮮で儼かな雰囲気漂う神社の中では、誰もが童心に帰ったかのような感情になる。

緩く暖かい場所であった。

それほど神社でのマナーに詳しい訳ではないので鈴を二、三回力ランカランと鳴らしてから手を合わせる。

「ねえ……おかーさん？」



「どうしたの？」

「ここの神様ってどんなかみさま…？」

「…夢寐神様よ！人々の睡眠を守ってくれる神様！」

「すいみん……？」

「夜になつたらお休みなさいするでしょ！その時に楽しい夢を見させてくれる神様よ」

「たのしいゆめ……？わたし、おそらを飛んでる夢がみたいな！！」

「じゃあ！！ようくお願いするのよ！良い子にしていれば夢寐神様がきつと見せてくれるわ！」

無事にお参りを終えると娘の手を引いて女性が神社の鳥居をくぐって石段を降りようと足を進める。

娘は、不意に振り返って神社の社にバイバイと手を振ってから帰って行った。

この時に娘が手を振った先で髪が少しだけ長く真っ白な髪をした少年が賽銭箱の上で手を振り返していたことに母親は気付くことはなかった。

妙に切れ長の眼と藍色の袴を身に付けた少年だった。

## デイズ1 神様って（前書き）

最近、柔軟体操を始めました。

簡単に関節が外れてしまうので気を使います。

## デイズ1 神様って

ねえ…知ってる？

神様がいることを証明するにはね…絶対的で完全なるモノの存在を証明すれば良いんだよ。

でも、絶対的なモノって何だろう？

書物は虫に食われちゃうし、ダンスも家も時間が経てば壊れてしま  
う……

人間だって何時かは歳老いて死んじゃうんだよ…

あれ……？

絶対的なモノってないよね……

神様って本当はいないのかな？

\*\*\*\*\*

コンビニのアルバイトを終えて帰路に着いたのは午後8時を過ぎ  
た辺りだった。今日も一仕事終えて鼻歌混じりで商品の余り物（  
戦果）を誇らしげに眺める。

「よし！！今日の夕食は中身が意外においしい包装おにぎりだわ！  
」

帰って家族と食べる様子をシミュレーションする。真ん中から裂い  
て海苔が破れないように優しく左右に引っ張り解放する。

「やっぱ人間は食う物食わんとやってけないわね……ただでさえ不  
況なんだから明日を生きるためにも！！」

グツと手を上に上げて三日月を掴もうとする。霞がかかった薄ぼやけた三日月だ。その動作をしていると街灯のある所に出て乱雑に切り揃えられた黒色のショートカットが薄く光った。

\*\*\*\*\*

ショートカットの女性が我が家であるアパートの二階にある一室へ向かって階段をリズミカルに昇り「204」と表記された扉をくぐる。

決してお世辞にも新築で良い部屋とは言えないが何とか住めるようなアパート。

アパート「キリカスミ」……築30年。間取りという立派な仕切りはなく「台所と畳6枚分の間がある」という一間だけである。

トイレとお風呂は共同。

それで家賃は月々3万円と得なのか損なのか分からない所である。でも家賃の支払いは待ってくれるので良いのかもしれない。

「ただいま」 ショートカットの女性が部屋で寛いでいるであろう家族に向けて言った。

「お帰り…雨螺…」

「コンビニの仕事、大変だったけどきっちり給料貰ってきたわよ…  
…あとは今月分の賽銭の計算して来月の予定を立てるわよ!!」

レジ袋の中身をちゃぶ台の前にガサガサと陳列させる。

「うん……そのこと何だけど……これを見て」

「いきなりね……何なに？」 新聞の三面記事を開いてとある話題の所をスツと指さしたのでそこを注視する。

そこにはあまり大きな話題とはなっていないが申し訳程度に衝撃的な事柄が掲載されていた。

「サイエンスニュース」 神様はいなかった!?

全世界に警鐘を鳴らす真実。

スウェーデンの王立科学アカデミーが驚くべき理論を今月の16日に明らかにした。僅かミクロサイズの物質が神の定説を覆したのだ。不確定性原理の正しさが証明されたことによる社会への影響が懸念される。

~~~~~

「な!?!?なんですよ!!」

乱れたショートカットが更に乱れる。神様がいないことが証明されてしまったことに動揺したようだ。

しかし今はそんなことを気にする余裕はなく焦った眼で隣にいるロングヘアの女性に伺う。

「えっ……も、ももしかして……賽銭は」

冷や汗をタラタラに出しながら恐る恐る。

「300円です……御守り等の売上金を含めて……はっきり言つたかなりピンチ」

300円ですと!!!

待て待てよ!! 受験シーズンで合格祈願や絵馬の売上が結構あったから暫くそれで暮らせるけど……この先のことを考えると……なんてことをしてくれんのよ科学者め!!

「バイトの時間を増やさないと……かなり深刻よ……」

「私もアルバイトの時間を増やす……」

と二人でピンチを乗り切ろうとしている二人の女性の足下にヒタヒタと這いずり回る白く奇妙な物体が動いていた。やがてその物体はおもむろにちゃぶ台の脚から器用にスルスルと上に登る。

「なんだよ！またコンビニのおにぎりかよ……たまには豪勢にステーキが食べたいぞ！！肉を出せ肉を！」

その白い物体は体長1m程の青大将であつた。しかも今日の晩飯にケチをつけると尾を返してちゃぶ台からニヨロンと下に頭を垂れる。

するとすかさずショートカットの女性が青大将の首根っこをガシツと掴んだ。年頃の娘さんにはとても出来ない芸当である。そしてそのまま問題の記事に青大将をこれでもかと言わんばかり見せ付ける。

「何しやがん……ん！？」

暫くの間、読むために時間を割くとショートカットの女性から解放された青大将は、ドーナツ形のクッションにとぐろを巻いて議論する体勢へと移行する。

「どういうことよ！！夢寐<sup>むひ</sup>！？アンタは、こんな姿でも一応神様でしょ……でも存在しているから科学者が間違っているってことではないのかしら？」

今話しをしたショートカットの女性は「山海雨螺<sup>せんがいうまら</sup>」。17歳で近所にある神社の経営をしている双子の姉妹の姉である。

「でも詳しく不確定性原理を調べてみたら……客観的に正しい……」

このロングヘアーの女性は「せんがいかまら山海鎌螺」。姉と同じく17歳。双子の妹。

二人の姉妹の言い分を聴いた所で夢寐は、ゆつくりと天井を一回見てから疑問を投げかける。

「お前らさ……神様がどんなもんだと思ってたんだ？」

「えっ!？」あまりにも予想外の質問に思わずたじろぐ雨螺。

「この新聞が報道していることを端的に言うとな……>>全知全能の神がいなくくという事をだぞ……」

「?」首を傾げる雨螺だが隣いた鎌螺は、理解したようで手をポンと叩いた。

「鎌だけわかったみたいだが……雨は理解出来てねーみたいだな……それでも日本人かよ」

「雨螺はそういう論理的な話に慣れてない……」

いち早く理解した鎌螺は、何故か土くれで出来た染みだらけの壁に向けて倒立をし始める。

「もう!!!二人して人をバカにして!!!もつとわかりやすく言いなさいよ!!!!!!」

理解が遅い經理担当の雨螺が目くじらを立てて怒る。 紹介が遅

れたがこの偉そうに喋っている青大將は、双子の姉妹が管理している山海神社の御尊神「夢寐神」<sup>むびがみ</sup>様である。しかし科学が発展してしまい神社に御参りに来る参拝客が減った為やさぐれている。現在は、信仰心が少なくなつて蛇の姿にまでランクが落ちてしまった。自称「昔の俺は格好良かつた!!」と言っているが定かでない。

「世界の宗教形態は大きく分けて二つに分けられることは知っているか？」夢寐が言った。

「えっ！？二つ？」

世界に数多くちらばる宗教がたった二つに分けられること等は初耳の雨螺が驚きながら言う。

「お前よくそれで俺の神社を経営していたな…大きく分けて二つと  
いうのは>>多神教<<と>>一神教<<だ」

多神教……日本やインドに見られる教え。様々なモノに神様がいる  
と考えた結果神様の数が多くなった。  
日本の八百万の神等。<sup>やおよろず</sup>

一神教……絶対的な能力を持つとされる一人の神を讃える教え。有名な所でキリスト教やユダヤ教等があるが定義が複雑で解釈が大変である。古代エジプトの王アメンホテプ4世が考案。

「今回の証明で大打撃を受けたのは一神教の方だ……端的に言っちゃえば「不得意な分野はありますけど神様います!!」という解釈でも正しいんだよ……」

「おお!!そうなんだ」



夢寐の説明に納得した雨螺が感心カンシンと言わんばかりに夢寐の三角の頭をナデナデした。

「やめろ！！」

あまり好きでないらしい。

\*\*\*\*\*

雨螺が手に入れてきた賞味期限スレスレのおにぎりを二人と一柱が包装紙を開けてモグモグと食べる。

コンビニのアルバイトのメリットは、賞味期限が切れる寸前の食品が貰えることである。

「ところで気になるのが、このご時世に誰が300円を賽銭してくれたのかしらね？」

雨螺がイクラと鮭の親子おにぎりを頬張りながら言った。

「誰だろーな……きつとかつこいい俺に惚れたファンだろー！」

「いや、ないない」

器用に焼きタラコのおにぎりをちゃぶ台の上に立てて食べる夢寐に雨螺が突っ込んだ。

「三丁目の駄菓子屋のタミ子ばあちゃん（87歳）だよ……」

駄菓子屋のタミ子……算盤そろばんで会計を計算しているが最近、指の力と計算力が弱くなりお釣りが10円多く返ってくる名物駄菓子屋。よく考えると最近では100円に進化しているからもつとマズイかも。

「ああ！！結構あの神掛かりのお釣り計算に何度かお世話になったわね」

ちゃっかり着服していた。

「俺が消滅しないでいられるのはタミ子婆さんのおかげか……でも87歳じゃ、そろそろあっちの世界に行っちゃうぜ……そしたら消滅、ヤバイな」

改めて具体的な数字が出てくると急に現実感が増したようである。

土地神は信仰心を存在のチカラとしているため人々の信仰心がなくなってしまう。

これは、土地神を生業とする神々にとっては共通のルールであり同時に神が人間を守るように出来た仕組みでもある。

「そうだね！！このままだと私達は路頭に迷うし夢寐が消滅しちゃうからなんとかしないとね……」

「夢寐の信仰心を取り戻す……つまり私達も経済的に上を向く……手を打つべき」

でもなあ……神様がいるにはいるけど「全知全能じゃないけど頑張ります！！」と言いホイホイ参拝に来てくれるステキなシナプスを持つている人間がいるわけないため……考えては案が頓挫するの繰り返しだった。

「うゝむ……ダイレクトに不完全な神様を宣伝文句にしてもなんだかし……」

雨螺が生気のなくなった夢寐神様を心配そうに見つめる。

「だ、大丈夫だから！！私達がなんとかするわよ」

慌て付け足すように言った。

それでも夢寐の顔色は晴れない……消滅するかもしれないという瀬戸際に立たされているのだから当然といえは当然であろう。

少しだけ沈黙が流れた後に夢寐が口を開く。

「消滅したらタミ子婆さんと一緒に三途の川を渡るのか……もう少し若い娘と一緒に逝きたいなあ……」

「うへっ……？」

夢寐のあまりに緊張感がなくなる発言に思わずずっとんきような声を上げてしまった。

どうやら彼が悩んでいたのは消滅後の世界で伴侶と同等となるタミ子婆さんの世話をしながら川を渡るのが嫌だのこと。

「なんで消滅することが前提なの！！？もつと頑張りなさいよ！！」

「あのな！！無理に決まってるだろうが！！一度、神に不信感を抱いた人間が簡単に戻ってくるかよ！！……夢寐神は消滅だ」

ダメだ……すっかりやる気を失ってなげやりになっているわ……でもまあ、少しだけ私には分かる。

今まで土地神として町を見守り続けたのに……今回の件で恩を仇で返されたようなもんだもんね。

「それに最近の氏子達を見てもそうだが人との繋がりが希薄になっ

ている…もう土地神は必要じゃないのかね……」

「夢寐……そんなことない…私達をここまで育ててくれた…」

「鎌螺の言う通りよ！！両親がいない私達を見捨てないでくれたじやない……まだ恩を返し終わってないのに消滅なんて許さないから！！！」

雨螺と鎌螺の両親は二人が生まれて間もなく交通事故に遭って亡くなってしまいました。つまり夢寐神が彼女らの父親代わり。

夕食も終わりおにぎりの包装紙をコンビニの袋にまとめて入れる。その後の会話がほとんどなかった。

雨螺は家計簿を付ける為黒の薄いフレームの眼鏡を掛けてパラパラと家計簿を開く。

しかし気持ちは今月の財政状況には向かず、夢寐の失われた信仰心をどのように取り戻すかということに向いていた。

（勢いで言っただけ…結構絶望的な状態よね…）

この場でもネックになるのが全知全能の神の不在を証明した不確定性原理だ。

これがある限り…信仰心を取り戻す手段が弱くなってしまう。明日から鎌螺に教えて貰いながら勉強しようかな…アイツってマニアックな所が詳しいから。果たして文系の私が理解できるかしら…？

どうすれば良いのだろう…雨螺が家計簿の収入の欄に「賽銭 300円」と黒のボールペンで記入した。

## デイズ2 案（前書き）

本日、久しぶりに本家や親戚の家に挨拶に行きました。

何処の家でも「どら焼」を茶菓子として出すのはなぜ？

## デイズ2 案

山海神社が守護する街「夜刀ノ街」やとのもち。  
常陸国風土記ひたちのかづちぎに伝えられる、多くの蛇を従える蛇神の伝説がある。

そのおぞましい姿を見ただけで一族もろとも滅び、跡継ぎが絶える  
とされ不吉の象徴。その祟りを鎮めるため何時しか不吉の象徴を祀  
るようになった。

それが山海神社の始まりであり街名の由来でもある。  
そんな由緒ある神社なのだが……

「くわあゝ！！暇だわ」

雨螺が巫女姿で箒を手に取り大きく体を引き伸ばす。そこには、  
ガランともの寂しげの境内が暇そうに空間に鎮座していた。まさか、  
ここまでとは…改めて噂話の怖い面を見た感じがした。

山海神社…昔ながらの悠久の美を現代に伝える造り。しかし、現  
在は廃れ始めて境内は名も無き雑草達が逞しい生命力を発揮してい  
るが肝心の社は、白蟻にでも喰われているのではないのかと疑う程  
のボロボロ具合で立ち入り禁止である…無論、賽銭は大歓迎なのだ  
が…。

春先で数匹の蜘蛛が必死に家作りをしているのが癪にさわる。

本日は珍しくバイトが午前中休みの雨螺と鎌螺は、巫女姿で焼け  
石に水とは思うがやらないよりかマシということで神社のもり立て  
をしていた。

「来ないな……」たけぼうき 竹箒を片手に神社の守護を任している狛犬もたに凭れ

掛かり、一息入れる。

すると青大将の姿をしている夢寐が神社の狛犬の石象をヒョイツと這い上がり巫女姿の雨螺に三角の頭を突き出す。

「うわっ!!」

一瞬、身体が仰天により地面から足が離れるが…すぐ様、足に地を着けて夢寐の三角頭を鑑みる。

「やっぱりだろ…こういうことなんだよな…自分ではロクに確かめもしない内に噂を信じるのが人間だ…もしかしたら自然淘汰の原則が働いて次にこの世から姿を消すのは>>土地神<<かもな……」

スルスルと狛犬の石象から降りて、境内の中で死んでいたバツタに群がる蟻の集団を見ながら言う。

すっかりネガティブモードに入ってしまったようだ。

「大丈夫だから!!私達が何とかするから!!」

本来、何とかして貰う側の土地神がすっかり諦めモードに入ってしまったので人間のアドバイスが活かせるか判らない。

夢寐は、無残に肉片と化すバツタの姿を自分の将来と重ね合わせて見ているようだった。

「そつえば鎌螺はどうしたのかしら？」

箒を持ったまま辺りをキョロキョロと見渡すが鎌螺とおぼしき人物は見付からなかった。いつもなら交代でアルバイトに行ったり神社の店番と言ったらおかしいが、神社の管理をしているのだが今日は珍しく二人共、アルバイトは午後からなので午前中は草むしりの

雑務が出来ている。

昔からの習慣で朝の通勤途中の会社員や朝練を実施している学生等も呼び込めるように山海家の朝は早く、「5時位には神社の境内に立つ！」ことをモットーにしている。

アルバイトで急な仕事以外は夜は9時頃、就寝して早朝の4時半に目を覚ますといった具合だ。暗くなったら寝るという狩猟民族や農民のような生活態度だが雨螺と鎌螺にはこの生活が合っているらしい。

このような生活ならば脳内の薬であり気持ちよい幸福感を与えてくれる>>セロトニン<<が分泌して……夜暗くなるにつれて眠くなる物質>>メラトニン<<が出るから快眠である！！と変な雑学マニアの鎌螺が知識を披露するのだ。

さて話を戻して雑学マニアで山海家の理系担当の鎌螺は何処へ？境内では、蛇影くらいしか見当たらず特徴的な黒く長い髪の鎌螺は見付からない。

階段でも掃いているのか？…

山海神社は、道路に面しているが道路から神社の全容が見えるわけではなく、少々階段を隔てあるため道路とは少しだけ標高が高い所に立地を構えている。

所々欠けていて怖いのが石の鳥居（修復したいが予算がない）をくぐり抜けて階段下をヒョイと覗きこんだ。（階段近くなら呼び込んで貰いたいわね……まずは近所の人々の交流が大事よ）と我が妹の仕事ぶりを観察するが……

>>今なら3000円ぽつきり！！<<

>>可愛い娘いますよ！！<<的な看板を手に持って宣伝している



巫女さんがあたかもいかがわしい商売をしているかのような妹がいて思わず力が抜ける。

そこへ、会社員風の男性が通りかかり巫女さんの眼が光る。

「社長さん！！どうですか！……山海神社へのお参りを日課にして気持ちよい朝を迎えませんか？……」

「すまないがこれから鹿児島まで単身赴任をしなければならんだ！！」

「そんなことを言わずに……旅の安全のこともありますし……5分とかかりませんよ」

「こっちは急いでいるんだ！！話しかけないでくれ……いかん！もうこんな時間だ！！せつかく新幹線の指定席を取ったのに無駄にしまう！！！」

と会社員の男性は、左腕に着けたデジタル時計を見ながら早足で山海神社からそそくさと離れてしまった。

「だめですな……心に余裕を持たないと……もっと可愛い娘を用意するべきか……（雨螺じゃ無理）……」

とキャバレーの宣伝のような看板を杖代わりにして体重をかける。早朝そんなに人がいるわけでなく森閑とする街の一角を見渡した。

ガンツ！！鎌螺が竹箒のモシャモシャした部分で叩かれた。

「何しとんじゃ！！鎌螺！誰がそんな呼び込みをしろと言った！！？」

どうやらボソリ声は、聴こえなかったらしい。

不意の一撃にキャバレーの宣伝看板がコトツ！と木製の乾いた音が森閑としていた街をつんざいた。

「痛い…竹箒の先っぽで殴るな…：眼に入ったらどうする？」

「アンタは本当に神社の再興を考えてるの？誰がバーの呼び込みをしろと言ったのよ！」

「失礼だな…考えているからこの結論に至った…：そうすれば人間の話題の種になる…」

どうやら鎌螺の策略は、「神社なのにキャバレーまが紛いの宣伝だ」

それを家族や知人に話す「そんな訳ないだろ」と話題になる

本当なのか山海神社に見学にやってくる　しかしキャバレーの宣伝はしない蔵かと癒しの場を提供する　「なんだか、ホツとするな」と人々は思う　大盛況となり夢寐の信仰心が増える　めでたし、めでたし。

「ということ…人間はギャップがあると惹かれることがあるから…：」とのこと。

喧嘩がメチャクチャ強い不良で常に喧嘩しているという人が学校の帰り道に雨に濡れた子猫に牛乳を上げたりしているのを見ると「意外に良い奴だな」となる。

普段、眼鏡を掛けている地味で大人しい女性が眼鏡をやめてコンタクトレンズにした時に眼がクリクリの可愛い女性に変容する。

こんな感じでギャップというのは心の仰天であるから記憶に残りやすいのだ。

「アホか！！キャバレーの神社に誰が好き好んで来るのよ！！いい、神社は子供達が楽しめるように安全に配慮してあるのよ！！そこにそんな噂が立つたら益々ダメじゃない！！」

昔の子供達は神社に集まっては様々な遊びをしてきた。鬼ごっこで境内を往路したり神社の御神木に手をつけて達磨さんが転んだもしたのだ。神社だからと行って立ち入り禁止の区域にしないで子供達の成長を見守り続けてきたし、子供達も不思議と安心してイタズラができていたのだ。イタズラの度が過ぎて神主に怒られるのも教育の一貫！！

昔から神はものすごく身近な存在だった。雷や雨も神様の仕業と考えて敬われており、そうしたことが信仰心となつて土地神にチカラを与えてくれる。テルテル坊主を家の軒下に吊るしておくのも立派な信仰である。

しかし現代は、雨は上昇気流で雲となった雨粒が落ちてくる現象だ、雷は摩擦による電子の移動であるということが科学的にわかってしまったため、そうしてしまうと今まで神秘的な現象だったモノが味気ない数式に変容してしまえば神様の信仰から離れてしまうのは、ある意味必然であろう。

「全く……最近の日本を見ていれば、まだまだ信仰は必要だと思うけどなあ」

日本人の死因のNo.1は、「ガン」であるとしているがそれは、ある意味自然死の一端であると考えた時に出る答えだが自然死でないことを踏まえればNo.1はガンから外れるのだ。……自然死でない死因とは何かつて？

それは、あまりに単純な脳の誤作動によって引き起こされる>>

自殺くくであらう。

社会的に自分の居場所がなくなり死の世界に思いを馳せるのは生物で言えば人間だけである。そしてこれは、現在の若者を中心に広がる負の連鎖として社会に大打撃を与えている。

「神様という…心強い味方が身近にいたから…昔は自殺が少なかった……」

「そうそう……科学が発展して偉くなった気になる人や人間が神を超えたとか言うけど、まだまだ人間が未来を歩んで行くには自分で心を豊かにして現実に向かって行かないといけないのよ。その行為を助けてくれるのが自分の心の中にいる小さな神様の存在よ……うーむ、どうしよう?」

「要は神社の教えをどのように伝えるかなんだよな…所謂、布教って奴だな」

「そうだね…布教と言えばキリスト教が出てくるわね……よく考えるとザビエルって凄くない!？」

フランシスコ・ザビエル…1549年に日本で初めてキリスト教を伝えたとされる人物。因みに日本に来て衝撃を受けたことは同性愛が当時の日本で公然と行われていたこと（キリスト教では重罪）。

「あいつらどんな感じでやってたんだ!?!…鎌、検索!!」

検索…山海家の歩く辞典となっている鎌螺が今まで手に入れた知識を披露する時の掛け言葉。鎌螺に聞けば大抵の情報が手に入るが本人曰く「瞬間記憶能力」は持っていないこと。訓練で記憶力を上げたい。

「ザビエル達は、廃寺となっていた大道寺を拠点として布教していた…一日に二回、説教して信者を集めたらしい…約二カ月で五百人位まで信者が増えた…」

鎌螺のデータバンクにザビエルの情報があつたらしく眼を上に向けて文章を讀んだ。しかし、その情報には我々の現状を打開できるような作戦は含まれていない。

「私達でその説教をやってみる？」

「無理だろ！絶対来ないと思うし誰が説教するんだ！？まさかこのメンバーでやる訳にもいかんだろ！！」

「そ、そうだね…」

確かにこちらの戦力だと蛇とまだ修行中の巫女アルバイター二人では宣伝力に欠ける。

結局、歴史を参考にしてみたが現在の人々には到底施すことができないことが分かってしまうに留まったが以外な所から案というのは閃いたのだった。

今回の大発見、雨螺は日本史の知識が人並みにある（農民の生活に共感をして授業中に号泣したからか？）



### デイズ3、雨螺のバイト（前書き）

終戦記念日ですね……

物置部屋を掃除していたら私の曾祖父の「陸軍士官学校卒業証書」が出てきました。

祖父は戦争には行っていなかったですが…祖父の兄が衛生兵として参加していたそうです。

もう亡くなりましたが生前に戦争の悲惨さを生々しく話してくれたのを思い出します。

平和に暮らしていけることに感謝しないといけませんね！

### デイズ3、雨螺のバイト

アルバイトというのは結構大変な仕事だ。

勿論、中学を卒業しただけの山海姉妹には安定した収入が得られることはないので毎日職種の異なるアルバイトをしていくことが必要となる。

アルバイトとアルバイトの間には空いた時間があるため山海神社にある古めかしい書庫をあさっては、巫女になるための勉強も欠かすこともない。

そんな姉妹であるが別に中がそれ程良い訳ではない。

前回の話で雨螺は若干の文系で鎌螺はバリバリの理系であるから話の根幹が多少なりともズレる。

気が合ったら一緒に居るし、合わない時はお互いにバラバラの事をしている。

夢寐曰く「これが永く人と付き合っていくコツだ」らしい。

まあ、そんな考えに賛同しているため姉妹でバラバラのバイト先で働いている。

そんな事により現在、雨螺は夜刀ノ町にあるコンビニ店「カンナ」で働いている。

コンビニ店「カンナ」：創業者が砂鉄を採集して砂と鉄を分ける仕事から始まった店。

今では軍手のツブツブから車まで手掛けているため便利屋と云われている。



「…あ、もしもし坪倉様ひらぐらでしょうか？…はい、わたくしはコンビニ「カナナ」の者なのですが坪倉様ご予約されました書籍が届きましたので何時頃来れますか？……………はい、明日の午後四時半ですね！かしこまりました。お待ちしております」

雨螺が丁寧な口調で仕事に励んでいた。

この店での主な仕事は料金を支払うレジ係なのだが今月は大人気シリーズの最新四巻が発売されるのでその対応に追われていた。

因みにその大人気シリーズというのは小説でタイトルは「細菌ケルスの冒険！」

細菌ケルスの冒険！…巷では大人気のファンタジー小説。

世界を支配しようと企むウイルス団とその企みを阻止するために立ち上がった細菌達との戦いを描いた作品。

現在第四巻「インフルエンザと風邪」がリリースされた。

因みにぬいぐるみが発売されており、一番人気は「大腸菌O-157」。

その書籍を予約した人に一軒一軒電話を掛けて入荷しましたの連絡をする。

予約特典でインフルエンザウイルスのタオルケットが付いてくる。

電話を予約数の二十人全て掛け終わり、ホッと一息を入れるが「カナナ」の店長は人遣いが荒い。

「おいバイト！！それが終わったら品物の補充をしておけよ！品物は段ボールに入って冷蔵庫に入れてあるから」

「あ、はい！！」

カンナの店の奥には冷凍機能付きの倉庫があり、それぞれ仕入れた飲料水や食べ物等を保存しており店内の品物の様子で補充したりするのだ。

階段を少し下った所で巨大な冷蔵庫のような扉を開けると勝手に閉まらないように木の棒をつっかい棒として止める。

開けるとまず飛び込んで来るのはかなり大きめのファンだ。そこからヒヤ〜とした空気が流れ込んでくる。

サスペンスなら殺しのトリックに使われそうな場所だ。

バカなこと考えてないで仕事と仕事。

雨螺は二、三回二の腕辺りを擦りながら目的となるスポーツ飲料の箱を開けて倉庫に備えてあるカゴに必要な分だけ入れる。

今の時期は、中学や高校で体育局の部活で新人戦が行われているので軽食としておにぎりやスポーツ飲料がよく売れている。

ウィダーinゼリーも同じく。

スポーツ飲料は必要な分だけ取り出してら段ボールは、すっかり空っぽになった。

空っぽになった段ボールは、ゴミとして町の収集所に出すので最後の人は、誰でも段ボールを畳んで出しやすいようにするのだ。

雨螺の頭の豆電球がピカツと光った。

錆付いているかと思われた彼女の電球が勢いよく付いた為、天気が少しだけ降り傾向になる。

店番をしていた店長は、今にも雨が降り出しそうな天気を確認して店先にビニール傘を商品として配置し始める程。

倉庫にいた雨螺は、畳んだ段ボールをもう一度箱状態に戻して、  
繁<sup>しげしげ</sup>と外装と中を確認する。

時には上下左右に振ってみたり、頭を入れてみたりと思い付く限りの情報収集を実行した。

流石に頭がスッポリ入るサイズではないので眉毛の上辺りで止まる（どっかの民族の衣装みたいな姿に頭が成る）

そうしてからの結論：（五分間の詩吟）

「これだわ…これを使うのよ！！今、最高に頭が冴えておる！」

冷たい冷蔵庫のはずなのだが思考が次々と数珠つなぎになっていき興奮が止まらない。

出来ればこの場で大声を出して壁をバンバンと叩きたい（喜びを身体で表現するタイプ）

そんな消化不良なエネルギーを少しでも消費する為に動作を大袈裟に大きくしていき、ボタンと段ボールを片手に冷蔵庫を出ていく。

何でもできる気がする！！そんな思いで階段をスキップに近い足取りで登っていき、商品が立ち並ぶ場所へ移動した。

（このことを夢寐や鎌螺に伝えないと！！！！）

外の天気は小雨がパラパラと降っている程度で移動には支障はな

い。

そのままアルバイトの制服を着こなしたまま自動ドアを開けて帰路に着こうと歩み始めるが……

「何処に行くんだ！！まだ勤務時間が終わっていないぞバイト！！」

店長が万引きGメンばりの俊敏な足裁きで鼻歌混じりの雨螺を取っ捕まえる。

肩を叩かれてから我に返った雨螺の顔が徐々に青白く変化して冷や汗がたらたらと滴り落ちる。

「黙って帰る程、俺の部下は嫌か？…だったら首にしても良いんだぜ！勿論、売れ残りの商品を譲渡する事もナシだ！！」

売れ残りの商品が貰えない 明日から食糧難が勃発！！

「そ、それだけは……」

蚊が飛んで行ったかのような細かい声で雨螺が言う。

「だったら奴隷の如く働くんだな！働かざる者食うべからずだ！」

そのまま制服の襟元をガシッと掴んで店長がバイト先へと雨螺を引きずり込んで行った。

「ごめんなさいい！！つい、出来心なんです」

目を涙でいっぱいにながら雨螺が断腸の思いで言った一言。とりあえず、拳骨一発で許されました。

教訓 「働かざる者食うべからず」

#### デイズ4、工夫が大事（前書き）

先日、実家近くの祭りにスタッフとして参加してきました。

焼き鳥を鉄板の上で焼いていたので汗が大変！！

## デイズ4、工夫が大事

本日のアルバイトは午後三時に終わりを告げた。

わざとではないにしろ一回サボりかけてしまったのだから馬車馬の如く働かされたのだ。

確かに拳骨で精算したと店長は言ったのだが後々の対応が……

「店内の掃除!!」

「はい!」

「それが終わったらトイレの掃除もしろ!!……おい、髪の毛が落ちているぞ!!」

「すいません!!ぎゃっ!」

焦った雨螺が躓いてスナック菓子のコーナーへ突っ込んでしまい  
…あと片付けが増える。

「おい!!なんだかんだで補充もまだだぞ!!」

「あつ忘れてた!!ぎゃっ!」

そして惣菜コーナーに（以下同文）

いつもの数倍疲れた雨螺がトボトボと夢寐と鎌螺が待っているアパートへ帰ろうと歩みを進めていた。

「おのれ!あの店長め!絶対!前世は、非道の……人を人間と思

わない…ほらアレ……とにかく悪い人よ（ 思い付かず）」

まあ半分は自分のせいなのだが……

小雨だった雨は軽く降っただけで今は、すっかりと晴れていた。  
現在は四月の下旬であるから雨期の前兆にしても早い。

戦利品のスポーツ飲料の段ボールを片手に持って雨螺は行く。

目的の品は手に入れたから長居は無用と言わんばかり早足で本部へ戻る。

水溜まりがあろうが歩みは止めない。

佐々木さん家の犬ベッカムが吠えようが関係なく早足で通り過ぎる。

佐々木さん家の犬……ベッカム佐々木さんの奥さんが大のベッカムファンで名付けられた哀れな犬。

秋田犬だが頭の部分は先月、金髪に染め上げられてしまった…今思えばこの頃から凶暴になった。

彼女は、これである物を作るという使命に燃えているのでどんな障壁があろうと前進を止めない。

それは正に男塾名物「直進行軍」を彷彿とさせる動きだ。

もはやどんな障害も叩き壊して進むことであらう。

ゴミ捨て場

そんなモノに構っている場合ではないと通り過ぎる。



今日は資源ゴミの日

関係ない私はこれから偉大なる仕事を……

修繕に役に立ちそうな古着が。

……くう！ 一旦引き返す。

まだまだ使える鉛筆がコロリ。

「……よし!!」

ガサゴソと聖戦の舞台に舞い降りて行く、そして鑑定団のような鋭い目付きで品定めをする雨螺。

その時の目付きは鬼気迫る感じの表情であるが…近い表情ならば近視の眼鏡を取って新聞を見るような目付きに近い。

そんな様子なもんだから……

「まま、あの人なにしてるの？」

「しっ!!見ちゃいけません!!」と子連れの親子に言われるがそんな言葉でへこたれていては貧乏人を名乗れるだろうか、いや名乗れるはずがない（反語）

雨螺は大学ノートやジャポ○カ学習帳を縛ってあるビニール紐を爪でバサリと切る。

雨螺の爪……ハサミもカッターも包丁もない時に雨螺が自己流で鍛えた爪。

伸ばせばリンゴレベルは軽く切れる業物。

爪カッターが搭載されているのは右手なので握手をする際は左手を差し出すのが好ましい。

そして封印されていた書物群をパラパラと流し読みをしていく。

そこに余白を発見すると……

「まだ使える！！雨に濡れているけど晴れた日に窓に貼っていれば乾く！！」

と言って辺りをキョロキョロ見渡すと自分の所有物とすべくノートの束を手につ。

鉛筆も胸ポケットにしまう。

（鉛筆削り機が問題なのよ！！これ位の長さなら私の爪で！）

鋭利な爪で鉛筆の先端を削り、黒鉛が綺麗な円錐となるのをうつとりと見る。

丁度、家計簿の道具類が切れてきたのでこれは嬉しい収穫だ。

雨に濡れてふにやふにやになったノートと鉛筆を抱えて満足そうに鼻歌を奏でながら立ち去ろうとする。

そして二百メートル程、道を進んで思い出す。

「はっ！段ボール忘れた！」

再びゴミ捨て場へ直行した。

\*\*\*\*\*

山海家の拠点となっているアパートに雨螺と鎌螺、夢寐が帰宅したのは午後五時を回っていた。

「……という訳でこの段ボールを使って目安箱を作るのよ!!」

雨螺のハツラツとした顔に一日を一生懸命過ごした鎌螺と夢寐のテンションでは、かなりの開きがあった。

夢寐がこんな成り（蛇）でも土地神なのだから決して暇ではない。夜刀ノ町の気の流れや氏子の様子に気を配り、常に情報収集を欠かさない（主にトカゲや蛙が情報を仕入れてくる）

土地神業界では「調律」と呼ばれている。

方や鎌螺は、夜刀ノ町のレストランでウェイターのバイトをしていた為、足が痛いらしく何度もふくらはぎを揉んでほぐす。

「…目安箱？」

「そう!!この箱に夜刀ノ町の人達の悩みや困ったことを紙に書いて入れて貰うのよ!!それを私達で解決するの!!」

「…また突拍子もないことを思いついたな…こいつ」

「今日から始まったことじゃないよ……」

雨螺の思い付きというか性格からなのか、日々一緒に生活していて驚かされることが多々あった。

雨螺は、妹の雨螺とは違いある意味での「天才的な集中力」を持

っていた。

鎌螺は性格的に飽きるのが早く、次から次へと遊びの対象を変えていた。

だからこそ広い知識が無意識に身についたのだ。

しかし姉の雨螺は、一度「面白い!!」という感情が浮かぶとトコトンのめり込むタイプでその状態になった時は、耳元で話し掛けても聞こえない程の集中をみせる。

雨螺と鎌螺が保育園時代が最たるもので……

ある日、アリを殺すことに興味を覚えた雨螺は、ドンドンのめり込んでいき。

夜刀ノ町のアリというアリを殲滅しにかかってしまった。

保育園の先生と夢寐が止めに入らなければ……今でも寒気がする。

そんな奴だから一度言いだしたら、納得するまで後には引かないだろう。

鎌螺と夢寐は互いに眼を合わせて溜息を吐く。

「ねえ!! 良いアイデアだと思わない!? 人を助ければ神社の復興にも貢献できるし!!」

「それは良いけど……悩み事を書く為の用紙はどうするの?」

鎌螺からもっともな意見を言い渡された。

「……………か、考えてなかった……………」

紙とて満足に手に入れるのが大変な山海家では死活問題である。  
先程の大学ノートの空白を探していた事から分かる通りです。

「雨の考えも良いと思うが……………一回で採用にはならないな……………さて、  
夕飯でも食おうぜ！今日の食料調達は鎌<sup>かま</sup>だったな」

「うん……………今日はカレーライスだから豪勢だよ……………」

レストランで余分に作り過ぎてしまったカレー鍋をちゃぶ台の上に置いた。

その傍らで雨螺は一人で落ち込んでいた。

## 山海家語録

「使える工夫がある限りゴミではない」      by 雨螺

## デイズ5、朝の光景（前書き）

今日はアリが巣の開墾するためにせっせと土を掻き出しているのを見てました。

いつかアリを主人公にした作品を書いてみたいです。

こんな事ばつかやってるから実の兄に「お前：よくわからん！」って面と向かって言われるんだよ。

## デイズ5、朝の光景

山海家の朝は早い。

夜の電気代をなるべく抑えるのと無駄なエネルギー消費を防ぐ行動の賜物が早起きを実現していた。

夜の時間に電気が付いている等はかなり珍しく灯りが付いたこの部屋を見た者は、幸せになるというジンクスがある程である。雨螺と鎌螺、蛇神の夢寐はこのことには気付いていない。

せいぜい、嗜好きの地域のおばちゃんかジンクスを信じきる無垢な学生が話しの種にするだけであり、山海家にとっての利益と信仰心には一切関与していないのが悔しい。

朝焼けが綺麗に窓から差し込んだのを確認して継ぎ接ぎだらけのボロのカーテンを開けるが……

パキッ      ガシャン！！

不吉な音を立ててカーテンレールが力無く畳の上に傾きながら落ちてしまった。

「……………」

「……………」

「……………」

三者が落ちぶれたカーテンレールを囲みながら嫌な空気がのしかかる。

当然、カーテンレールを最も落とすことが困難な者から口を開いた。

「…おい！どうすんだよ！」

「だ、大丈夫よ！！バイトが終わったら直すから！」

「雨螺は…力任せよくない…」

「うつさいわね！！ガタが来ていたから丁度良いの！！人生常にポジティブシンキング！！」

どうやら犯人は天然の雨螺だ。

何気に雨螺は手先が器用なので家にある整理棚を作ったりしているのも彼女だ。

天然なので失敗も多いが…

朝からとんだハプニングが起きてしまったが、そこは伊達に蛇と一緒に長年暮らしているだけのことはあり、必要な責めが終われば朝の支度を始める。

朝食は毎回二人で一週間のローテーションでそれぞれ準備をしている。

今週は雨螺が当番だ。

土地神の夢寐は窓辺に這って昇り、変温動物として通例の陽なたぼっこを開始した時にお化けがプリントされたエプロンを着た雨螺が思い出したように近づいてきた。



「そつだそつだ！夢寐、この雨でふやけたノートを乾かしておいて！」

「はあ！！何で俺がそんなことを！」

「山海家の教訓は、働かざる者食うべからずよ！！蛇だからといってサボるのはダメ！」

「面倒いからパス……」

「あつそ！じゃあ「ときめきキャンディー」はお預けね！！」

ときめきキャンディー……味ごとに色が違う飴。飴の回りにざらめが付いているので舐め応え抜群。

夢寐の好物。

「なつ！！あるんなら先に渡せ！！給料の前借りを要求するぞ！！」

「だめ！前借りはクセになるから絶対に渡さないわよ！仕事の世界はそんなに甘いものじゃないわ」

「なんだとおー！！俺はこれでも神様だぞ！！」

「陽なたぼっこが必要な神様なんてありがたみがないですよーだ！」

やんややんや言ってくる白蛇に舌を出して嗜めると雨螺は台所に向かった。

すると壁に掛けてあるCDの裏面と面と向かって何やら口を開け

てブツブツ言っている鎌螺がいた。

壁に掛けてあるCD……鏡のような高級な代物は入手するのが困難だったのでゴミ捨て場にあったCDで代用している。

ちなみに外に出せばカラス除けになる優れ物。

「やっぱり出来てる……またか……」

「どうしたの鎌螺？……あ、ひょっとして口内炎ができたな！……」

コクンと頷く。

「最近、まともなご飯を食べていないからね！よし、今から特効薬を塗ってあげよう！」

「だ、大丈夫！……自分で治すから……」

「口内炎は自力じゃ治せないから！早く」

「……うん……」

そして雨螺が手にしていたのは立派な玄界灘産の「粗塩」であった。

袋に入っている粗塩を一滴みして鎌螺の口内炎へと擦り込ませる。

「ぐうううー！！……（声にならない）」

そりゃ昔は拷問や尋問にも使われており、諺である通り「傷口に塩を塗る」喻えられる程の激痛を生む物だからしょうがない。

しかし山海家では、赤チンやオキシドールの類いは高級品の為、  
備蓄をしていない。

本当に小さい頃からケガをすれば粗塩を傷口に擦り込むのが当たり前になったのだ。

擦り傷 粗塩

口内炎 粗塩

捻挫・打ち身 粗塩

骨折 粗塩

馬鹿の一つ覚えのようなワンパターン戦法である。 良い子は真似しないでください。

関係ない話であるが「バキ」の登場人物であるビスケット・オリバを思い出した。

ビスケット・オリバ：世界一自由な男。 獄中にいながらバイクを乗り回す破天荒な性格だが妻に優しい。

皮膚に粗塩が擦り込んであるので並大抵のことでは傷がつかない。

大体、一分程この痛みに耐えることができれば次第に痛みは引いていく。

後は塩っぱいだけである。

「アルバイトしながらだから食生活が偏るのが問題ね!!」

痛みが引いてきた鎌螺の顔が今度は塩気の塩っぱさに筋肉を一点に集中させて水分を絞り出す反射運動をしていた。

「塩っぱい……」

表情の起伏が乏しい鎌螺なのだからこの時に運動をしておかないと退化してしまうのではないかと思う。

だからちよつとだけ塩の量を増やしたのは秘密。

「そうだ！！朝は簡単で早い納豆にするか！！先週タイムセールで買い溜めしておいた奴！！」

先週、三パックセットが五十円という破格の値段でセールをしていたので総力を挙げて購入してきた。

冷蔵庫から国産納豆「匂わ納豆」を一パック取り出して今日の朝に炊いておいた二合のご飯を大きめの皿によそり出し、納豆と絡める。

簡単な納豆ご飯の出来上がりだ。

これを食べて本日のスタートを切る。

山海家教訓「ケガをしたら粗塩！！」

山海家だけの教えなので絶対に真似しないでください。

誤って粗塩が傷口にかかってしまったら流水で洗い流し、速やかに医師の指示を受けてください。

## デイズ6、ささめきこと（前書き）

父の部屋が凄いいことになってきました。

元々、バイクや軍事関係のマニアでよくそれ関係の本やモデルガンを買ってきているのは知っていましたが……

ある日入ったら「ガスマスク」なるモノが買っておりビックリしました。

家族でバラバラの趣味を持っていると世界が広がります。

## デイズ6、ささめきこと

午前九時

雨螺と鎌螺はそれぞれのアルバイト先に働きに行ったようだ。

雨螺は最も体力の使う引っ越しのバイトへ。

鎌螺は膨大な書庫の整理をしなければならない懐刀図書館のバイトへそれぞれ赴いて行った。

一柱、境内で大学ノート为天日干しにしながら時折ページを尻尾で器用にちよいちよいと捲りながらまんべんなく乾かす。

一柱……神様の単位。その昔、家の大黒柱に神様が宿ると信じられていた為こう数える。

昨日雨螺が即席で作った段ボール目安箱は、山海神社の社務所に一応入れて置いた。

社務所…神社を管理する場所。

その目の前には少し大きめの神池がある。

所々に風情ある蓮の葉がプカプカ浮いているのが見える。

夢寐は思い立ったようにスルスルと白い身体を這って移動し池の側で声を出した。

「ケイはいるか！？いるなら顔を出せ！」

朝方だが山海神社はひっそりとして人間などいないので夢寐が話

してもあまり問題ではないだろう。

目撃されてしまえばそれこそ大騒ぎになってしまう。

その声に反応した存在が山海神社の神池の底から眼をギラギラさせながら浮上してきた。

それは全身緑色の生物で蓮の上にゲコツと飛び乗った。

「これはこれは夢寐神様！カエルのケイでございますゲロ」

カエルのケイ……長生きしたカエルが人語を介すようになった存在。夢寐に数年前から弟子入りして立派な土地神になるように日頃から修行をしている。土地神見習い。

「ご用件は何ゲコか？」

「ああ、ちょっと「ささめきこと」として夜刀ノ町で広めて欲しいことがある！」

ささめきこと…神が出す噂話。信託やお告げが正しい表現だが夢寐は、堅苦しいのが嫌いなので前者を使っている。

「わかったゲロ！！少し待ってください」

再びポチャンと池に飛び込んで底においてある木製の板と筆を持ってきた。

ささめきこと専用の板でこれに神文字を反転させて書き込んでス

タンプの要領で町内の至る所に押しつけければ自然と噂話が広がる優れ物。

「内容はそうだな」「山海神社で悩み事を目安箱に入れば解決するらしいよ!」といった感じでまとめてくれ」

噂話なので断定にせず曖昧を意味する語尾にするのがミソ。

カエルのケイは筆でサラサラと神文字を書いていたがある単語の部分で筆が止まってしまった。

「すみませんゲコ」…「目安箱」の神文字を忘れてしまったゲコ」

「勉強不足だな！」「だろ……しつかり修行しないと土地なんて任せて貰えないぞ！ちゃんと神文字だけじゃなくて陰陽五行の修行もしてるんだろ？」

「ゲロゲロ……まだ水気しか修得していないゲロ」

「土地神にとっては陰陽五行は基本中の基本だぜ！水気、火気、木気、土気、金気が土地の調律に必要なスキルだから復習しておけよ！」

陰陽五行：陰陽道でもお馴染みの代物で土地神を目指すなら全て修得しておかないといけない。

いわば、土地神にとっての義務教育みたいな感じ。

水気：水を操る術。

火氣：火を操る術



木気…樹木を操る術

土気…大地を操る術

金気…金属を操る術

土地の調律はとても繊細な作業なのでどれか一つでも欠けていたら満足に守護することはできない。

「まあ…信仰心がなくなつて落ちぶれた俺が言えるタチではないがな…もうこのご時世だ土地神なんて職業を目指すのをやめて自由に生きたらどうだ？」

科学的に神様がないことが証明されてしまい人間達がいつまでも神社に参拝するはずがないから、何時土地神業が廃業するか分からないからこそその言葉だった。

「いえ！土地神はオイラの夢みたいだゲロ！！人間が好きだから目指しているんだゲロ」

土地神は他の神とは違い土地の縁が深いから、必然的に人間達との関わりも深くなる。

「へえ！まだ水気しか使えない能ナシがエリートの土地神になれつかよ！！天地がひっくり返ったって無理な話だぜ」

「能ナシならその分、鍛練を積みば良いんだゲロ！！それでは、さめきことを広めていくゲロ！！」

そう言つと木の板を背中に乗せて紐で落ちないように縛る。

そして、神池の蓮から蓮へ移動し地面に降り立つとピヨピヨンと跳躍しながら鎮守の森の中へ消えて行った。

鎮守の森…神社の回りを囲んでいる森林。

自然に対する恐れから神は派生したのでこういった所に建てられることが多い。

カエルの土地神見習いを見送った夢寐は、軽く溜息を吐いた。

「何で俺の周りには、前向きに生きる奴が多いんだ（誇張）？…これじゃ…俺も前に進まないで格好悪いじゃねーか…」

五月の大型連休である「ゴールデンウィーク」を翌週に控えた水曜日の日だった。

## デイズ7、鬼灯高校（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです……

足に血豆ができて歩くと痛いです。  
取り敢えず冷やして経過を見る……

## デイズ7、鬼灯高校

夢寐達が顔面を見事に蒼白し信仰心を取り戻すべくあくせく動いているが…

世間一般では、今回の「神様不在の証明」という事実については何も感慨がなかったに等しかった。

レベル的には話題がなくなった時の繋ぎみたいな感じであろう。

「……やっぱりサイコーだね」

「うん!!」

話題が消沈

「…ところで神様がいないことが証明されたいよ!!」

「へえ〜! そうなんだ」

「ワタシもよく分からないけど数学的に証明されたいよ!!」

「ふ〜ん（興味なし）、そうそう昨日の特番見た？」

……と言った風に理系離れが叫ばれる現代においては、それほど大した話題でない。

元より興味がないので（新聞でもチヨコンとしか載っていないなかったのも一因）数週間経ってしまえばエビングハウス忘却曲線の法則

に従って忘れていくのであろう。

今ニュースや新聞を騒がせている話題と言えば…

アイドル歌手「雪電<sup>せつでん</sup> 瑞希<sup>みずき</sup>」が映画の主演に抜擢。

謎の探偵「アイスバーン」が二十年ぶりに活動再開。

この二つである。

\*\*\*\*\*

県立鬼灯<sup>ほおずき</sup>高等学校 二学年七組教室

五月の大型連休であるゴールデンウィークが間近に迫っていることもあつてか教室の中の空気は良く言えば「のほほん」、悪く言えば「弛<sup>ほ</sup>んでいる」の状態だった。

みんながこの休日<sup>きゅうじつ</sup>に何をするかまたは、一緒に何をしようかの相談を彼方<sup>あつち</sup>や此方<sup>こち</sup>で熱心に会話<sup>かいわ</sup>をしている。

そんな中で一人の目付きの悪い男子高校生が机に向かつて新聞に目を通していた。

「アレッ！！修久<sup>しゅうきゅう</sup>しぶりじゃねーか！始業式以来だな」

坊主頭のいかにも球児<sup>きうし</sup>ですといわんばかりの青年が新聞を読んでいる人に話しかけた。

「ああ…たまには顔見せないと担任がうるさいからな…毎朝、電話が鳴りっぱなしでノイローゼになりそうだ！」

この青年の名前は「黒道<sup>くろどう</sup> 修隕<sup>しゆいん</sup>」

鬼灯高校二年生であるがあまり学校に来る事がない。しかし学年トップの成績で通過している為、落ちこぼれている訳でない。

「それよりも何で今朝の新聞を読んでんだ！？オレはもう読んだぜ！！！」

「お前の場合…四コマ漫画だろ…」

「うつ！！……失礼な今日の番組予定も目を通したぞ！！」

「似たようなモンだろ…朝見てる暇がなかったから学校に持ってきただけだ…昨日起こったストーリーカー事件の犯人がまだ逃走中か…」

黒道はサイズが微妙に合っていない眼鏡を取り、制服のワイシャツの裾でレンズを拭いた。

そして探す。数日前から奴の動きを知るため。

ペラペラと新聞をめくっていきスポーツ欄を通りすぎた辺りであるうか……あれに関する記事を見つけた。

一目見ると黒道は、口を大きく耳まで裂けるかのような笑顔を浮かべ立ち上った。

「まじか…ついに動きだしやがった！！アイスバーンが…」

黒道が食い入るように見ている記事というのは…

>> 謎の探偵 アイスバーンからの予告<<

この国を担う大企業「一菱<sup>いちびし</sup>」の全てをアイスバーンが今夜調べに入るといった内容だった。

謎の探偵 アイスバーン…国籍不明、年齢不明、性別不明の謎多き人物。個人で動く事が多いが依頼を受ければどんな任務も完遂する圧倒的な頭脳と行動力、権限を持っている。

二十年前に活動がピタリと止まったが再び動き出したようだ。

「今夜か…」

「ん、どうしたんだ修!？」

「ば〜か! 帰んだよ!!! こんな一大事に授業受けてられっか!！」

そう言うつと新聞を折り畳んで鞆の中にしまつ。

黒道は家に教科書を持って帰らない派で始業式に購入した(された)教科書をそのままの形で保管していた。

「帰るつたつて…もう先生来ちゃうぜ!！」

「それはお前が適当に言っておいてくれ!…じゃっ!！」

敬礼擬いのポーズで手の平をヒラヒラさせながら黒道は黒板側の扉から出て行こうと手を掛けるが……

ガラガラ……

一人でに扉が開いて一瞬だったがビクツと驚く。

「あっ!！」

「えっ…」

身構える黒道の目の前にいたのは古典の先生であり担任の先生「寺澤」だった。

身長は小さい方であるが常に笑顔でポジティブに生きるパワフルな女性の先生だ。

寺澤先生は満面な笑顔でニコツと笑うと学校中に響くのではないかと心配するような大声で叫んだ。

「黒道くんであー！ー！！やあぁつと来てくれたんだね！！」

生徒に関しては本当の愛息子、愛娘に向けるような愛情で接してくる先生なので始業式以降初めて登校してきた黒道に会えて嬉しいらしい。

「やったー！！やっと七組のメンバーが揃ったね！！先生大感動」

（だああああー！面倒くさいのに見つかった！！オレが一番苦手なタイプなんだよ）

七組のあまりの騒ぎに他の組の生徒が廊下を覗き込むように扉から黙って見ている。

「みんなあー！！黒道くんが来たよ！！」

今度は教室に入ってクラスの連中に黒道が登校してきたことを高らかに報告する担任。

その場の空気に押し潰されそうになりながらも黒道はお腹に手を当てて…



「あーイタイター！！これはかなり痛い！すんません頭痛が激しいので早退します！！はい、さよなら（棒読み）！！！」

「ふえっ！！どこいくの！お腹押さえながら頭痛って…黒道くううん！！！」

今度は断末魔に似た叫びが鬼灯高校に響いたようだ。

## デイズ8、アイスバーン（前書き）

足の血豆を病院で診て貰いました。

医「平井さん…これは穴を空けて血を抜いちゃいましょう！」

平「えっ！！ちよっ」

注射の針で刺されました…痛くなかったですが精神的にきつかった…

抜いた後にガーゼで力強くゴシゴシしないでよ…地味な鈍痛がくる  
んた（泣）

## デイズ8、アイスバーン

ハッカー…コンピュータやインターネットにおいての問題を最も労力の少ない方法で解決する術を知っている者。

そのためには卓越した知識力が必要になるため一流のハッカーまでに幾つかのランク（能力によって異なる）を経ていく必要がある。

インターネット上の知識を悪に転じさせた時の呼び名は「クラッカー」であるが広義の意味でメディアは「ハッカー」と表現することが多い。

謎の探偵「アイスバーン」もインターネットやコンピュータにおいて並外れた能力を持っている事がわかっていくが…ありとあらゆる知識を有していたアイスバーンにとっては数ある情報の一つしか認識していないだろう。

話がアイスバーン寄りになってしまったが鬼灯高校に通う黒道も似たような技術を独学で手に入れていた。

彼が生まれた時代には、アイスバーンの活動は休止状態で生で知ることはない…しかし、世間を騒がせたアイスバーンの存在が人々の間でそう簡単に無くなることなく一種のヒーローとして紹介されている。

テレビ洗脳時代と云っても過言ではない程、私達にとってテレビというのは非常に身近な存在である。

そんな彼もテレビから大部分の情報収集に使用しているので自然

と興味は湧く。

丁度、中学生の年代という思春期の始まりに本物の天才を見た黒道にとっては、正に革命とも云うべき位の影響をアイスバーンから受けたのだ。

思春期に本物の天才を見た人間は、かなり強い。

彼はのめり込むようにプログラムの知識から近代科学の最先端までを学んでいく。

学ぶという表現よりも頭に叩き込んだという表現の方が近い気がする。

それは善でもなければ悪でもない……ただ単純な探求に每晚陶醉していた。

ここまで頭に叩き込んでも未だに全容の見えないアイスバーンは、彼にとって終生の目標であると同時に倒すべき不滅の敵となっている。

善でも悪でもないハツカーの卵である黒道は、自らをアメリカの俗語から「ギーク（卓越した知識を有うする者）」と名乗っている。非常に傲慢なネームであるがここまで嘘でも良いからハツタリをかましてやらないと一生、アイスバーンに勝つのは無理だと感じた為だった。

\*\*\*\*\*

黒道はサイズの合わない眼鏡を左手で調節しながら夜刀ノ町の中を歩いていた。

真っ直ぐと家に帰る訳でもなく特に目的地がないようにランダムウォークを続けている。

「参ったな……今日は姉貴が久々の休みだったから学校に来たのだが……こんな面白い事が起きるなんて知らなかったぜ」

黒道は六つ上の実の姉と二人暮らしをしている。

あまりに姉の性格がアレなので黒道は好んで接触するのは極力避けているのが現状であった。

（このまま帰るとうるさいからな……一応このパソコンでもハッキング出来るから何処かで構築しながら時間でも潰すかな？）

黒道はポケットからiPodを取り出して、イヤホンを耳に装着する。

曲は大ファンの「MISHIA<sup>ミシア</sup>」の代表曲だ。

MISHIA……アイドル兼女優。トップアイドルの雪電瑞希のライバルとしての構図でお互い切磋琢磨している。ご令嬢のような容姿。

雪電瑞希……トップアイドル兼女優。男勝りな性格で間違った事を言っていると確信した場合は、大御所にもはつきりと物を言う。

MISHIAのライバル。

音楽を聴きながら身を隠すのに最適な場所がないかを物色する。

生まれ付き目付きが悪いのでここに警察官がいたら間違いなく職務質問やら補導の対象になるであろうが幸い、付近にそんな人物が

いないので安心だ（？）

「山海神社！…懐かしいなラジオ体操で普通ってたっけ」

ふとした通りを歩いていると山海神社の名称が彫られた鳥居が目  
に付いた。

小学生の時に夏休みの宿題で否応なしに姉貴に連れて行かれた場  
所だ。

そういえば皆勤すればお菓子の詰め合わせが手に入る特典があっ  
たから姉貴に連れて行かれたんだっけ……

黒道は山海神社の鳥居をくぐり抜けて拝殿の脇に隠れるように腰  
掛けた。

拝殿……人々が普段参拝する場所。賽銭箱があるのもここ。

（取り敢えず一菱の監視システムに潜り込めば良いかな…予告が新  
聞にあったことを踏まえるなら監視システムも厳重にしてあるだろ  
うが関係ないぜ！）

黒道はブラインドタッチの凄まじいスピードでキーボードからハ  
ッキング用のデータを構築していった。画面に流れるように窓が幾  
重にも重なり一菱会社と警察関係のメインとなるコンピュータのデ  
ータを捜す。

初めての二社同時のハックだがアイスバーンの能力には遠く及ば  
ないだろう。彼（彼女？）の全盛期のハッキング能力はとんでもな  
いクラスであったからだ。

アイスバーンは欲しいと思った情報や確証が喩<sup>たとえ</sup>国家機密であろうともパスワードを解読してしまうし、同時に十社のコンピュータを相手にしても勝利してしまう位の实力を持っていたとされている。

半分は都市伝説関係の番組や本、雑誌に載っていた情報ののではとんどもが誇張しているかガセの線が濃厚であろう。

だが、火のないところに煙は立たぬという諺<sup>ことわざ</sup>があるから全てを否定することもしない。

今夜：予告というか新聞に記載されている記事が正しければアイスバーンは何らかの形で三菱会社に侵入することだろう。出まかせであろうがハッキングという危険な方法で見てみる価値は十分にある。

おや…searchに些<sup>ち</sup>か（いささか）時間がかかっているようだ。

## デイズ9、ぶっきらぼう（前書き）

実家で飼っている鵜骨鶏うこっけいの爪がかなり伸びてきました。

バビルサ（豚の仲間で角が変に伸びた種）のように胴体を貫かない  
か心配です。

鵜骨鶏…白い鶏。卵が高級品らしいが作者の家にはオスしかない  
為、卵入手不可。



## デイズ9、ぶっきらぼう

「ふう、やっぱりネットも警備が厳しくなってるか……でも大体は把握させて貰ったゾー！」

黒道は得意気に笑みを浮かべてパソコンの画面を食い入るように見つめていた。

アイスバーンがコンピュータに造詣が深いことは周知の事実だ。警備が厳重になるのは頷ける。

だが……一つ腑に落ちない事と無理矢理あげるとすれば>>予告<<であろう。

アイスバーンは、過去の事例から推測すると極力「リスク」を回避する手段で探偵業や企業の不正をやったのけていた。

しかし、今回は何故「注目を浴びるというリスク」を背負ってまで予告をしたのかが解らなかった。

「復活したことを世の中に誇示すると仮定すれば辻褄が合うが……どうもこれだけではないような気がしてならねえ……」

自分の復活の誇示だけでない……つまり他に陰となる目的が存在しているのか？

警察のファイアウォールを突破した辺りで黒道は、先程まで流れるように打ち込んでいたキーボードから手を放して考える。

「アイスバーンの目的は一体？……」

「あいす…ばーん？それがどうかしたの？」

全く新聞を読んでないのかよ！！情報飽和時代になんて奴だ！と黒道が直感でイラ付いた。

「今夜一菱会社に侵入するらしいんだよ！！新聞を読んで……」

アレ…？ちよつと待て！？

俺は一人でここまで来たよな…学校の先生や友人、その他を含めても追いかけてくるのはいないはず。

黒道はサイズのあっていない眼鏡を直しつつ隣の声をした方へ静かに向いた。

「何か凄いことになってるんだね！！……それってパソコンでしょ！私もアルバイトでやらされるんだけね…もう、ちんぷんかんぷん！」

髪の手切り方を知らないのか前髪が乱雑に切られた同年代くらいの女性が興味津々そうに黒道のパソコン画面を眺めていた。

「だ、誰だお前！？」

髪はつつんの女性から距離をおくように上半身だけを左側に偏らせる。

「おつと紹介が遅れたね！！けど…他人に名前を訊く時は、まず自分から名乗らないとイカンぞ少年！！」

少年…これでもクラスの中でも背の高い方なのだが（あんまし行っ

たことがないが）…っ！何なんだコイツ？ 何でこんなに馴れ馴れしいんだ？

それでも社交辞令の一貫として名前だけでも名乗っておくことにした。

「……黒道…修隕だ」

「おお！！黒道君が初めまして！私は、この山海神社の巫女（修行）をしている山海雨螺です！！」

巫女……？そんな胡散臭い仕事をしているのかよ…

黒道はあからさまに怪訝そうな顔をしてジャージ姿の雨螺を見る。

「……ハッ！！ダメだよ！このジャージはまだ使うんだからあげられないよ！！」

物ごいか何かと間違えられたらしい……それに、かなり要らないのだが…

「それにしてもアイタタ…やっぱ一人でダンスはきつかったかな！」

「……？引越しの仕事でもしているのか？」

もう就職してることは俺よりも年上なのか？…タメだと思ってたが…

「いんやバイトだよバイト！結構キツイけど給料が良いから時々やってんのよ！冷蔵庫運んだ時に指を挟みそうになって焦ったもんよ

！」

その時の様子について演劇部顔負けの動きで説明する雨螺。  
恐らく動かしした手の範囲が冷蔵庫の大きさであろう。

「何か苦勞してんだなお前も……／＼／」

隣に座っていた雨螺がジャージの襟元をパタパタを動かしながら  
汗を蒸発させる行動に顔を赤らめて黒道は雨螺から顔を背けた。

パタパタと動かす隙間から白色の下着が見えてしまい思春期の黒  
道には刺激が強かったようだ。

その様子に気が付いた雨螺はえへへと笑いながら

「引つ越しのバイトしてきてそのままだったから汗臭かったかな？  
ごめんゴメン！」

そついう問題ではないのだが……ダメだかなりの天然と警戒心の無  
い子だ。

黒道は汗をかいたと言った雨螺に鞆からスポーツ飲料水を渡した。  
勿論、赤面した顔を隠すように外方そっぽを向いて……

「えっ!？」

「やるよ!!喉渴いてるんだろ!？」

「で、でも……」

「やるから受け取れっの!!ここに来る前に自販機で買ったけど、  
俺には必要なくなった!」

働かないと物が貰えないと身体で覚えてしまっている雨螺は激しくオドオドしながらスポーツ飲料水を受け取った。

実はさっきから喉がカラカラだった雨螺は、まだ空けてない蓋を外して一口飲む。

甘い…果糖が干上がりそうな口の中で優しく包みこむように広がる。

「……それで良いんじゃないの？俺達はまだまだガキなんだぜ！！  
偶には他人に甘えるのも必要だと思うぞ……生活が大変なのも察しが付くけど無理すんなよ」

雨螺の目の前にいる青年が立ち上がって軽く伸びをするのが見えた。

何故かとてもスローモーションに濃密に脳内に鮮明に記憶されるのを感じた。

脳がこの一時が重要だと判断したからなのだろうか……よく分からない。

「さて…ゲッ！！ファイアウォールから締め出されているし！！」

かああー！しまった突破したら迅速にハックしないと締め出されてるんだっ！

今までの苦労が水の泡となつてしまい黒道の眼鏡がずり下がるように呼応してテンションが下がった。

「あゝあダレた……もう一回やり直しかよ……まあいつか！」

「あ、あの…ごめんなさい！！よく分からないけど私が悪いのかも！！」

雨螺がペットボトルを持ちながら申し訳なさそうにしているが黒道は、パソコンをシャットダウンして鞆の中にしまいながら舌をペロツと出しながら言った。

「ばっか！こっちの落ち度だよ！！俺が油断していたからだよ！」

鞆にパソコンを入れ終わると黒道は、ゆっくりとズレた眼鏡を直す。

「久しぶりに他愛ない話しができて楽しかったぜ！…巫女修行だった？頑張れよ」

そついうと黒道はiPodについているイヤホンに付けて神社の参道から出て行こうとした。

「あ、あと飲み物ありがとう！！」

雨螺が慌て付け足すように大きめの声で言ったがiPodの音楽で聴こえなかったらしくぶっきらぼうに鳥居をくぐって行ってしまった。

(……／／／)

なんか心臓がドキドキと早鐘を打つような感じがする。久しぶりに同年代のしかも男子と話をしたからだろうか？

この時の気持ちの整理が未だに処理できていない。まだまだ訊きたい事があったのだが……

とりあえず帰ったらシャワーを浴びよう…そう思って住んでいるア  
パートに雨螺は駆けて行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0850t/>

---

困った時の神頼み!!

2011年10月9日23時43分発行